第３章　湯島史跡調査の記録

韓　　一瑾

はじめに

湯島は熊本県上天草市大矢野町に位置する島である。島原半島と天草諸島のほぼ中間に位置する周囲約6.5kmの小さな島であるが、「天草島原の乱」の時、天草四郎をはじめとする一揆方の戦略上の要衝となった島として非常に有名だ。別名「談合島」と言われ、歴史の舞台で輝く島である。

2011年夏の天草フィールドワークで、筆者が所属した調査班は湯島の史跡を中心とする現地調査を行った。そして、湯島の歴史に関しての文献調査やインタビューも行った。以下、今回の調査について述べていきたい。

2011年７月30日、江樋戸港から約30分のフェリーに乗り、湯島に上陸した。到着後、湯島の歴史に関しては郷土史家の宮崎常治氏にインタビューを行った。宮崎氏の話によると、湯島はもともと火山活動によって海底より隆起した玄武岩からなる溶岩台地の島であり、全体は岩で構成される火山島であった。昔の記録によると、湯島の元の名前は「石間」である。「石間」という名前は当地域の地形地質と一致し、文字通りに石によって囲まれた村であった。その前提として、湯島の50歳以上の住民たちは「ユシマ」と呼ばなく、「イシマ」と呼んでいた。かつての地名が示すように、ここは特別な地理環境に恵まれたところである。

天草島原の乱の折、この小さい島でどのようなことが起こったのか。どうしてこの島を談合の場所として選んだのか。この２つの疑問を持って今回の調査に臨んだ。まず、海岸に設置してある案内図によって、談合峰公園に向かった。そこでは談合島の碑を見つけた。（写真１）

碑の説明板によると、建立は昭和28年（1953）12月28日であり、建立者は湯島出身で元大矢野町長の森慈秀翁である。碑の正面題字「談合嶋之碑」の筆跡は徳富蘇峰[1]の直筆である。碑文は慈秀翁の書きおろしで談合島の名称のいわれから始まり、天草島原の乱のきっかけとなった島原、天草両郡の領主の圧政、一揆の発生理由、天草四郎の殉教戦での善戦、原城での三万八千信徒殉教者への追悼文で構成されている。最後に慈秀翁の詩「談合し人をしのんで　たたずめば　かすかにむせぶ　みねの松風」が刻まれている。

碑文により、湯島は天草島原の乱を前に、天草側と島原側が意思統一のための談合を重ねたことから、「談合島」の別名が付けられたとわかる。しかし、天草島原の乱と湯島の関係についての詳細な記載は不

1）徳富蘇峰は、明治・大正・昭和の３つの時代にわたる日本のジャーナリスト、思想家、歴史家、評論家。また、政治家としても活躍して、戦前・戦中・戦後の日本に大きな影響を与えた。

写真１　談合峰公園　談合嶋の碑

明なままだ。この関係を解明するため、次の調査へと向かった。

２　嶋原御陣図をみる

写真２は天草島原の乱の当時の御陣図（写）である。御陣図というのは、乱に参加した大名たちが当時の合戦を記録し、論功行賞の資料として作成したものである。この「嶋原御陣図」は天草島原の乱を描いた数ある絵図のなかでも、精緻な記載が第一級であると評される絵地図だ。これは宮崎常治氏が提供した絵図の写しで、当時、湯島には二つの小島があり、本島を合わせた三つの島より構成されたことが理解できる。さらには「湯島：此所にて益田四郎相談を遂ぐるに就て談合島と改名す、嶋廻り一里程切岸なり、山頂に早々遠見土手これを築く」という説明が書いていった。ここでの「益田四郎」は天草島原の乱の中心人物である「天草四郎」であり、実父の益田甚兵衛は小西行長に仕えたとされる。「相談」というのは「乱を起こす相談」であること、つまり、天草島原の乱は湯島という所で乱を起こすという意見がまとまって、民衆が立ち上がった戦いである。

天草島原の乱ではリーダーたちがこの島に集まり、作戦を練ったことから、「談合島」の別名があるが、談合の場所として選ばれた理由については、次の説がある。有明海[2] は日本で一番潮の干満差が大きいところで、高さで表すと、干潮と満潮の水位が最大で６メートルの開きがである。これが有明海の海底地形構造（例えば、海底が広くて浅い、その上、湾口部が狭いなど）を印象付けている。写真２は

2）九州北西部にある海。福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県に跨る九州最大の湾である。

写真２　乱当時の絵地図の写し（原本は柳川古文書館所蔵）

干潮の状態であり、海水がなくなり、海岸のあたりには岩がたくさん出ている。潮の干満にしたがい、周りの海水が流れていて、船を動かしている。有明海を航海する船は潮の流れを利用したそうで、湯島から長崎のほうに向かって行こうと思うならば、潮が引くときに船を出して潮の流れに乗せていったようである。引き潮の時、潮は東のほうから流れ、船は自然に天草の鬼池港や早崎海峡に辿りつくことができる。早崎海峡のあたりは日本で３番目に潮の流れが早い。要するに、湯島の周辺海域では潮の流れが速く、簡単に船を動かすことができる。その上、湯島は天草と島原半島のほぼ中間に位置したので、どちらから出発しても便利である。さらに、普通は海に船を置くことができないが、湯島ではそれが可能だった。調査によると、引き潮の時、湯島の東のほうにおいて水が流れなく、船を繋留できる。そこ（今の湯島中学校のあたり）は昔から船を停めて置く場所に使っていた。この場所の地名は興味深い。たとえば、湯島の中心部になる「千場」というところがあり、「せんば」という名前の由来は「先場」や「船場」、「干し場」、「戦場」など四つの説がある。しかしながら、いずれも当地域の地形的特質と関連していた。「先場」は「先の場所」という意味で、外から来た船が湯島に着いたとき、初めて上陸した場所である。「船場」というのは「船の場所」であり、船を置く港の意味である。「干し場」とすれば、江戸時代は湯島が三つの島から成り立ち、一つは現在大潮の干潮に姿を見せる真砂の盛州がその島の跡であろう（古地図立証）。その小島と本島の白州の間が海流の流れも速く、そこに海草が潮流場所に大量自生していたと言う白州から北に至る場所がその「干し場」になって地名化されたそうである。「戦場」というのは寛永14年（1637）に天草島原の乱勃発時の絵地図に大矢野本島からの船着場を前後に（潮流の都合上）取れるこの地の中高台に天草四郎方の戦旗が翻っている。一説には益田四郎時貞が最後は島から南西の方角に見える原城の地下壕を潜り抜け地の利を生かして、原城本陣には参加しない守兵を残して湯島のこの地を最後の戦いの場と決めたと言う。その上、湯島の「はいどまる」や「南風泊」などの地名も渡海船が南風系の風待ちに錨を降ろして停泊したところだと言う証拠により、湯島の東側は昔から船が上がりやすかった。要するに、潮の流れが速いし、両地の中間地域にあるのが湯島を選んだ理由だ。

天草島原の乱とかかわっている談合峰公園から降りて、次に見学したのは畑の奥に佇む湯島灯台である。

3　湯島灯台

「嶋原御陣図」によると、もともと現在灯台の所在地には家が３軒あった。この灯台は大正５年（1916）12月１日に初点し、近代灯台の原型と言っていいほどの素朴で美しい姿をしている。

当時では灯台守の手により点され、カーバイトよりガスを作るため一週間ごとにカーバイトを取り替えなければならないような大変な作業があった。昭和38年（1963）、浜口灯台守の時よりガスはボンベ詰めとして送り届けられるようになり、一連の作業は大変楽になった。昭和41年（1966）電灯に切り替えられたので無人灯台となって現在に至る。歴代の灯台守は錦夫、間野、稲浦、佐藤、新井、中臣、浜口の各氏となっている。[3)]

この頃の日本の主要灯台は先の大戦時に空爆の目標となり、その多くが破壊された。都市圏から離れた天草の近代築造の灯台はそのほとんどが被害を被ることなく、今なお当時の姿を残している。

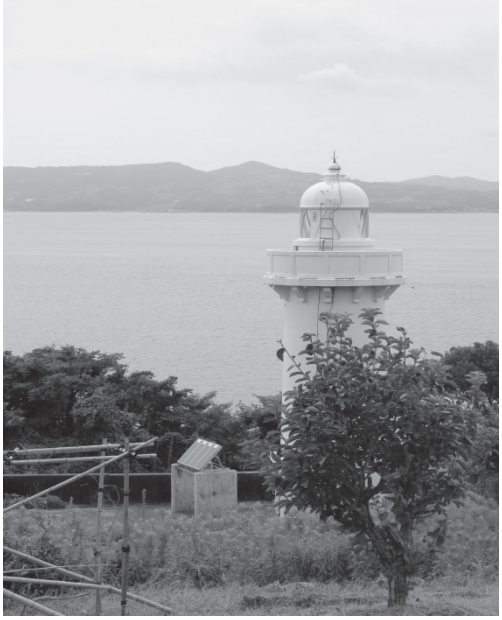

写真３

写真４

熊本県　湯島灯台

3）森田則栄氏の遺稿『湯島之今昔』を参照

4　諏訪神社の鍛冶水盤

最後に、諏訪神社境内に安置された天草島原の乱の時の鍛冶水盤を調査した。

水盤の説明板では次の紹介文を書いていた。「此の水盤は寛永十四年（千六百三十七年）島原の乱当時三百三十有余年前切支丹教徒が湯島、峯の盆地に集まり軍評の傍ら武器製作の際鍛冶職人が使用したものと伝えられている。此の水盤はかって島の畑の中で発掘されたのを天草郡御領大島の鍛冶職人が島を訪れた際、大島に持ち帰り大島の浄泉寺に寄進されていたのを、昭和六年末頃湯島校長らが中心となり同寺に交渉して漸く取り戻し、村長の計らいで諏訪神社境内に安置されたという。」これによると、乱に使用された武器はここの神社に設置されている石の鍛冶水盤で作られたそうである。しかし、当時、湯島には鍛冶職人28人が集められ、武器を作ったことを証明することができない。湯島の高台の窪みからは鉱滓が出るため、製造所跡だったのではないかという推測があるが、それ以上の証拠がないため、結局歴史の謎になったままである。

かつて湯島の人はみなキリシタンで、天草島原の乱のとき、天草四郎と一緒にみな原城に行ってしまい、亡くなってしまったそうである。それから６年間、湯島はずっと無人島だったが、他の地域から人々が移住して、新しい湯島の地域社会ができて、今日に至っている。宮崎常治氏によると、移民は主に長崎、古賀、佐賀の三つの場所から来たそうである。現在、古賀家が湯島に移住した記録も古文書として残されている。

写真５　諏訪神社境内　天草島原の乱の時の鍛冶水盤

おわりに

今回の湯島史跡調査は、天草島原の乱で、この小さい島にどのようなことが起こったのか、どうしてこの島を談合の場所として選んだのか、さらには天草島原の乱以降、この島ではどのような変遷を経ているのかを解明した。今回のフィールドワークを通じ、史跡調査が空間を軸とする地理学と、時間を軸とする歴史学という違いを越えて、新たに文化交渉学の視野で行うべきであろうと改めて認識を深めた。